
イヴの灯

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イヴの灯

【Nコード】

N3058B

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

イヴの夜に灯る様々な光。人それぞれに、それぞれの思いで輝くイヴの灯は幸福の輝きなのか、それとも孤独と絶望に満ちたものなのでしょうか。クリスマス・イヴの夜をテーマとしたオムニバス形式の短編3部作。

【第1夜】漆黒のイヴ（前書き）

ひとりぼっちのイヴの夜に、突然の停電。純也はやるせない思いで暗闇に佇んでいた。突然隣のベランダから聞こえる女性の声。隣は女連れか……。純也はどんなイヴの灯を見るのか。

【第1夜】漆黒のイヴ

純也は真っ暗な闇の中で、ひとり、やりきれない思いに浸っていた。

どうして彼が暗闇の中にひとり佇んでいるのか。

引越して3週間あまりの部屋。

何年も住み慣れた部屋なら、真っ暗でもたいがいの事を把握しているから、身動きもとれるだろう。しかし、彼はそれほど自分の部屋を熟知していない。

試しにさつき動いたら、忽ち何かにつまずいて、暗黒の世界に吸い込まれそうになった。

「っていうか、何でイヴの夜に停電なんだ？」

そう、今夜はクリスマス・イヴだ。

しかし、だからと言って彼に特別な用事があるわけでもない。寧ろ、何の用事もないから、この部屋に一人でいたのだ。そして、突然目の前が漆黒の闇に包まれた。

イヴの夜の、白紙の予定…… その空しさに拍車をかけるようなこの停電。しかも、送電線の関係なのか、通りの向こうの家やアパートには煌々と明かりが灯っていた。

「なんだ、それ……」

純也はゆっくりと窓に近づいて外を眺めた。部屋の中よりも、微かに街路灯の明かりが届くベランダの方がいくらか明るかった。

「今年はなんてついてないんだ」

純也は、僅かな星の見える夜空を眺めて呟いた。

「ごめんね、純也。あたし、好きな人ができたの……」

何言ってやがる。二股かけてた事ぐらい、とつくに知ってるんだ。

「そうか…… 仕方ないよ」

純也はここに越してくる直前に、一年半付き合った沙織と別れた。
「新しいアパートはキッチンが少し広いから」

そう言って引越しを決めた純也に、沙織は

「あたし、いっぱい料理作ってあげるね」なんて言った。

そんな社交辞令は迷惑なだけなんだよ……

そんな事なら、わざわざ引越す事も無かった。別に以前いたワ
ンルームで充分だった。

小さな電気コンロも別にはならなかったし、オモチャのよう
なシンクだって、ちゃんと洗いモノもできた。

5、5畳の小さな部屋も、何でも直ぐに手が届くし、掃除も簡単
だった。

二股をかけていると知りながら、最後は自分に留まるという変な
自信があった。だから彼は引越しをして、沙織の身体も心も、より
自分に向くように仕向けるつもりだったのだ。

ところが、いざ引越しの日程も決まり、彼女に手伝って貰おう
と連絡をとった途端、出てきた言葉は別れ話だった。

純也は、二股の相手を一度見たことがあった。たまたま出かけた
渋谷の109前で見かけたのだ。

それ以上は見えていられなかった。純也自身、正直怖かったのだ。

しかし、一週間前、彼はその男がどんな奴なのか調べた。前に一
見した時は、自分と変らない年格好に見えた。しかし、違っていた。
確かに年齢は純也より一つ年が上なだけらしい。が、しかし、そ
の男は最近流行りのIT長者だった。麻布の高級マンションに住ん
でいた。

こんな1Kのアパートじゃ、彼女の心を抑えてはおけないのだ。
おそらくキッチンだけでもこの部屋より広いに違いない。

「ふざけやがって……」

純也は沙織に一言言ってやりたかった。でも、止めた。

相手の男の、あまりの生活基盤の違いにバカらしくなったのだ。
いや、本当はそんな事をしている女々しい自分が嫌になったのかも

しない。

いいじゃん。沙織が幸せになれば。

そんな事を呟きながら、どうせ最後は捨てられるんだ。おまえも、俺と同じ気持ちを早く味わえ……………などと考えてしまう自分に、ますます嫌気がさす。

空中でパツと瞬いた光が、一瞬で流れて夜空に溶けるように消えた。

「流れ星……………」

初めてではないが、前に何時見たのかも覚えていないほど久しぶりに見た。23区から外れると、流れ星が見えてしまうのかと、純はますます悲壮感に囚われた

突然、ガタツと物音がした。

純也はビックリして身を硬直させた。物音がしたのは隣のベランダだった。

停電で隣も出てきたのか？そう思い、ホツと息をついた。

隣って、どんな奴だろう。確か、俺よりも後に引っ越して来てたよな。

こんな日にお互い顔を会わせて、野郎二人で微笑みなが「こんばんは」なんて、ああ、ヤダヤダ……………」

きつと隣の奴も、イヴの夜に一人で寂しい野郎だ。なんて思うに違いない。

「あのう……………」

ハッ……………女の声……………隣は女連れか？

そうだ、イヴの夜、自分の部屋に女を連れ込んでいても不思議は無い。

ちきしょう…………… 新居に女を連れ込もうなんて、まるで俺の計画そのものじゃんか。

「ねえねえ、隣の奴イヴに一人だって、可愛いそお……………なんて言われてたまるか。

「あの… すみません……………」

しかし、ベランダから呼びかける声は、この寒空の澄んだ空気のように透き通っていた。

「なにか？」

純也はベランダに顔を出さずにぶっきらぼうに答えた。

「あの……ライターとか持ってませんか？」

何だよ、火貸せっつか……

「あの……あたし、タバコ吸わないもんだから」

タバコを吸わないのに、何に火を使うんだ？ここはストーブ禁止だし……

「持ってますけど」

純也は少し投げやりに言った。

「通りのこちらだけ停電なんですネ」

彼女はおつとりと笑って「あのう……お一人ですか？」

来たつ。それが訊きたかったのか？そして、部屋にいる男と笑って、この闇夜に自分達だけの、一点の和み空間を作ろうつてのか。

「あの……聞こえてますか？」

「ああ、はいはい。火ですね」

純也はそう言っけてポケットからジッポライターを掴んで窓から手をだした。

「あの……」

「なんすか？」

「よかつたら、こっちの部屋に来ませんか？ロウソクで明かりを作ろうかと……」

彼女は純也の少し横柄な態度に震える笑みを溢していた。

顔は見えていない純也だったが、彼女の怯えるような声を聞いて、自分の粗雑な態度に気が付いてハツとした。

俺って、なんて嫌な野郎なんだ……

「あの……じゃあ俺、玄関から行きます」

彼は気を取り直して彼女にそう告げると、ライターの小さな炎の明かりを頼りに玄関へ向かった。

なんだ、ライター・ひとつで意外と見える……

「気を付けてね」

窓の向こうから、小さな声が聞こえて、純也は少しだけ口元に笑みが零れた。

バキッ……

「イテッ」何かを踏んづけたみたいだ……

「あたし……越してきて間もないから、一人でチョット心細くて……」

隣の真つ暗な玄関に入ると、彼女は小さな懐中電灯を手に、一人佇んでいた。

「ごめんなさい。これから出かけるのか？」

彼女は遠慮気味に訊いた。

純也はやけに明るい声で「いや、俺も一人で暇だったんです」

部屋の中へ入ると、テーブルには大小たくさんのキャンドルが並んでいた。

雑貨屋でもやるのか……

長細いもの、ずんぐりと太いもの、やけに丸いと思ったら、果物や野菜の形をしているもの……

「あたし、かわいいキャンドルを集めるのが趣味で、でもそれが役に立つ時があるなんて思ってたかった」

彼女の笑顔の横で、純也は一つずつ、キャンドルに火を着ける。

火の着いたキャンドルを使って、彼女も他のキャンドルに次々と火を灯した。

ひとつひとつは小さな炎だが、十数個ものそれに包まれると、部屋の中は山吹色の明かりでいっぱいになった。

ロウソクの光がこんなに暖かいなんて…… 純也はそう感じた。

柔らかな光に照らされた、彼女の穏やかな笑顔。

色々なアロマキャンドルを同時に着けてしまった為、部屋中が多彩なアロマの香りに包まれてしまい

「ごめんなさい。使うつもりじゃなかったから、全部ちがうキャン
ドルで……匂いが混ざって変だわね」

彼女は微かに揺らめく炎に照らされて、弱々しく微笑んだ。

それでも純也は、こんなクリスマス・イヴもいいかも知れない。
そんな気持ちになった。

「大丈夫さ。真っ暗よりはずっといいよ」

純也は、暖かなイヴの灯に照らされた彼女に向かって

「それより、ケーキでも買いに行かない？」

E N D

【第1夜】漆黒のイヴ（後書き）

次回【第二話】秘密の部屋

【第2夜】秘密の部屋（前書き）

家になんて帰りたくない。秘密の隠れ家を持つ貴子。その無人のボロアパートに、ある日一人の男が迷い込んで来た。貴子を暖かく包んでくれる彼には妻子が在ることを、彼女は知っていた。イヴの夜に彼女が燈した灯とは……ちょっとダークなクリスマス。

【第2夜】秘密の部屋

貴子は古びた畳一面にストーブの灯油をぶちまけて広げた。

黒ずんだ畳がみるみる濡れていくと、狭い部屋の中には灯油の臭いがたち込めて、頭がくらくらした。

先ほどまで降っていた外の雨は止んでいた。

厚い雲の隙間からは、蒼い三日月が微かに顔を覗かせていた。

.....

少女には秘密の隠れ家があった。

誰もいないボロアパートの空き家。

西武線の線路の直ぐ脇に在るこのアパートは、何時からか判らないがもうずっと前から誰も住んではない。

彼女が初めて西武線の電車の窓から見たのが何年前なのかは覚えていないが、その時既に人が住んでいる様子は無かった気がする。

敷地は雑草が伸び放題で、幾つかの部屋のドアは壊れて半分外れかかったりして、窓ガラスもあちこち割れている。

彼女はここに、週5日は立ち寄り、ただ床に寝転んで時間を費やす。

1階の右から二番目の部屋。全部で10部屋ある中で、ここだけが窓もドアも壊れていなかった。もちろん、柱は黒々と半分腐ったようで、畳はぼろぼろで、茶褐色に変色している。

近くのゴミ集積場に出されていた小さなカーペットを拾って来て、彼女はそこに敷いた。床の全部には満たないが、ささくれ立った中央の畳を隠すのに充分だった。

彼女は家に帰るのが嫌だった。

父は何処かに女を作りほとんど帰っては来ないし、母は、何かと付き合いが多く出歩くばかりで、家の事を何もしない。

寒々としたあの家にいるくらいなら、このボロアパートの方が居心地が良かった。

どこに行っても、一人には変わり無いのだから……

ある日の夕方、彼女が何時ものようにこの部屋に立ち寄ると、知らない男が一人、ゴロリと床に寝そべってカーペットを占領していた。

襟の角が鋭角で、高そうなダークグレーのスーツを着ていた。

「オジサン。そこ、あたしの場所なんだけど」

本当はオジサンと呼ぶほどの歳でもなく、それほどにくたびれた顔でもない。髪の毛は耳が隠れるほどで、さらさらとツヤのあるマロンブラウンだった。

「あああ、ごめん。つい横になつたら寝ちゃって」

男はそう言つて起き上がると、白い歯を見せて笑った。

「寒くないの？ ストーブつければよかったのに」

彼女は男の傍に屈み込んで言った。

「えっ、このストーブ使えるのかい」

「あたしが拾つて来たのよ。重かつたんだから」

男は笑つて「でも、灯油はどこから？」

「それは、聞かない方がいいわね」

そう言つて、彼女も笑った。

「ここはキミの隠れ家かい？」

「そんなところ」

彼女は、ストーブに火を入れた。

小さな部屋は、あつという間に暖かな炎の温もりに包まれた。

「キミは何時からここに？」

「半年くらい前かな」

彼女は鞆からお菓子を取り出して「あなたは どうしてこんな所に？」

「前にこの辺を営業で回った事があってね。ここが気になっていて、今日、ぶらつと来ちゃった。って感じかな」

彼は彼女が差し出したポツキーを手に取りながら言った。

「オジサン、サラリーマン？」

「あ、ああ。まあね。企業戦士ってやつさ」

「ふううん。なんか、大変そう」

「ま、金を稼ぐってのは大変さ」

彼は優しく微笑んで「キミは？高校生？」

「見て判るでしょ」

彼女は悪戯っぽい笑顔を返して「あたし、ハグミ。ハグって呼んで。本名は聞かないでね」

ハグの着ている制服は、見れば誰でも判る名門女子高の制服だった。

「じゃあ、俺はトウジとでも呼んでくれよ」

ハグはプツと吹き出して笑った。

「オジサン、コテコテのエヴァ世代ってやつでしょ」

ハグは笑いを押し殺しながら「あたしの名前、レイの方がよかった？」

トウジは少しすねた笑いを浮かべて「じゃあハグってのは？」

「知らないの？」

ハグはポツキーを啜えて「やっぱりオジサンだね」

窓から差し込む茜色の陽射しが、二人の長い影を作り出していた。

彼は、毎週火曜と木曜日の夕方、このボロアパートへ来た。

あたしは、火曜と木曜日のこの部屋が、何時もよりも暖かく感じるようになって、それはあまりにも心地よく、いつもここを覆っていた鉄の鎧を一枚ずつ剥ぎ取るようにして彼にさらしていった。ここを覆う鎧がなくなると、今度は身体を纏うものを脱ぎ捨て、裸を彼にさらしていた。

それほどに、彼は、あたしの荒んでいた心と身体を優しく包んで

くれたのだ。

「ねえ、観覧車」

「観覧車？」

「観覧車に乗ってみたい」

「何処の？」

「何処でもいい。おっきな観覧車……」

彼は、ただ優しく微笑むだけだった。

今年のクリスマス・イヴは日曜日。

彼はどうあってもここへは来られないだろう。

貴子は知っていた。

彼が無造作に脱いだ上着の内ポケットから落ちた定期入れの中に、奥さんと子供の笑顔があつた事を。

トウジとは、彼の小さな子供の名前だった。

指輪はしていなかった。でも、裸の彼の首に掛かったネックチエ

ーンには、プラチナリングが輝いていた。

それでも彼女はじつとしていらなかった。

無駄だと知りながら、彼女は彼が利用している駅へ向かった。ただ、そうしたかっただけで、別に彼に会おうと思つたわけではない。

この日の夜、彼の近くで、同じ町の空気を吸いたかったのだ。

ただ、それだけだった。

駅のロータリーでは、奏でるクリスマスソングに紛れて、ケーキの叩き売りをやっている声が響き渡っていた。

鉛のように重く低い夜空からは、雪ではなく小雨がぱらついていて。街路灯とロータリーを行き交う車のランプが、冷たい雨に滲んで、溶けかけのキャンディーのように臃に輝いていた。

ケーキ屋の隣にあるフライドチキンの店から、見覚えのある姿が出てきた。

まさか、彼の姿に逢えるとは思っても見なかった。

貴子は一瞬前に踏み出した足を止め、とつさに駅の大きな庇の柱に身を隠した。

彼の笑顔が、一緒にいる誰かに向けられていたからだ。

直ぐ後ろからは、小さな子供と手を繋いだ小柄な女性が出てきた。3人は絶え間ない笑顔で何かを話しながら、幸せと言うオーラに包まれていた。

彼の奥さんであろう小さな彼女は、写真では判らなかったが、その背格好の雰囲気は貴子に似ていた。

彼は、結婚前の清純な彼女の姿と、貴子の瑞々しい白い身体を、心の中で照らし合わせていたのかもしれない。

あたしって、バカだ……

改札口から溢れ出てきた人波が、その先の家族を掻き消して、あつという間に彼女からは見えなくなった。

糸のような細い雨は次第に強さを増して、路面に映る街の灯が雨音に揺れて、キャンドルライトのように彼女の心を静かに照らし出していた。

……
……

彼女は、ハグミという架空の名前をその場に脱ぎ捨てて、100円ライターを握り締めた。

どうせ、一緒に観覧車になんて乗れっこないんだ……

棒状にねじった古新聞に火を着けると、それを灯油で湿った床に放り投げた。

放たれた炎は、少しの間その場でメラメラと燃え留まったが、まるで魔法が解けたかのように一気に床に広がった。

乾燥した木造二階建てのボロアパートは、さっきまでの小雨などものともせず、あつという間に荒れ狂うような烈火の輝きに呑み

込まれた。

貴子は燃え上がる真つ赤な火炎を背に、狭い路地を歩き出していた。

次第に近づくサイレンの音が、夜気に鳴り響いていた。

寒々と冷え切った空からは、炎で舞い上がった無数の小さな紅い火の粉が、雪のように降りそそいで闇に溶けていった。

「メリークリスマス……」

貴子は、降りそそぐ小さなイヴの灯を見つめて呟いた。

E N D

【第2夜】秘密の部屋（後書き）

次回【第3話】だん吉のイヴ

【第3夜】だん吉のイヴ（前書き）

のら犬家業の柴犬だん吉は、自由気ままなその日暮らし。ある日、だん吉は公園で一人の少女と出逢った。彼女はイヴの夜、片思いの彼にプレゼントを渡すが……犬の目線で見たイヴの灯はどう映るのか。

【第3夜】だん吉のイヴ

僕は柴犬のだん吉。気ままな野良犬家業さ。とは言うものの、それほど気楽なもんじゃないよ。

だって、毎日ご飯にありつけるか判らないし、お風呂も入れない。まあ、水は苦手だから、風呂はどうでもいいんだけど、雨の日は、雨宿りするのも大変なのさ。

僕がいつから野良犬なのか忘れてしまったけれど、もうだいぶ長い事、鎖で繋がれた事は無い自由奔放な生活さ。その代わり、生きる努力は自分でなくてはならないけど……

まあ、自由と不自由は、何時も隣り合わせだから、仕方がないけどね。

保健所のガス室送りにならないだけでも幸せかもね。

武士は食わねど……………なんだっけ……………

そんな僕も、この公園に辿り着いてからは毎日ご飯にありつける。何故かと言うと、この先の定食屋の娘が、僕にほいほいと食べ物を与えるのだ。

そろそろ……………あ、来た来た。

「だん吉。おいで」

ええっ、たまにはお前がここまで来いよ……………なんて、言わないよ。ご飯の為なら何処までも。って距離じゃないけど。

僕は、寝床のベンチの下から這い出ると、のそのそと歩いて彼女の傍まで行った。

「だん吉。お手！」

またかよ……………

「おかわり」

はいはい……………

「おあずけ」

すぐくれよ……………待つのはいいんだけど……………ほら、よだれが勝手に。

「だん吉、よだれよだれ」

そんな事言っても、無理だっちゅうの……

彼女の名前は片岡さつき。中学生という職についているらしい。さつきが初めて僕に会ったのは一週間ほど前だ。

「だん吉？ダッサー……」っていうか、首輪もしてるし名札まで付いて、あんた何処から来たの？」

彼女はそう言って笑いながら給食の残りらしき食パンをくれた。

さつきは、身体は小さいが、活発で軽やかで、元気に何時も笑っている。

ただ…… やたら僕に芸をさせたがる……

さつきは何時ものように僕にご飯をくれると、塾へ向かって歩き出した。

でも、最近彼女は少しだけ元気がない。

原因はアイツか。

同じ塾に通う、たしか涼介って言ったっけ。さつきはそいつのことが好きらしいんだな。

確かに涼介は誰とでもよく話をしているし、女の子にもモテるようだ。

でも、涼介にはすごく仲のいい娘がいるんだ。えっと…… そうそう、実華っていったかな。

これがまた、子供のくせにマブくて…… いや、可愛くて。

でも、僕はさつきの笑顔の方が好きだけどね。

実華の笑顔はなんだか、男に対して計算ずくで、心の無い笑顔なんだな。

「あ、見て見て、あの犬まだいるよ」

あ、来た来た、これが実華なんだな。

「ここに住み着いたのかな？」

実華の連れが言った。

「この耳ピヨンとしててかわいいよね」

イタタタ、耳引つ張るなつつの。

「ねえ、何か食べるもの持ってない？」

実華の言葉に、連れは「ええっ、あたしガムしかないよ。しかも

ミント」

「ガム食べるかな？」

食べるかつつの……

まあ、悪気はないんだろうけど……

「あつ、涼介！」

公園沿いの通りを歩く彼を見つけて実華が手を振る。

ほら、この笑顔。なあんか、大人びて信用ならないんだよな。

木枯らしに吹かれた落ち葉が、ここそこに吹き溜まりを作る頃、日に日に辺りは騒がしくなって、今日はやけに笑顔で歩く男女が多い。

そうかクリスマスかあ。て事は、去年のクリスマスからもう1年経ったって事なんだな。

夕方から酔っ払いがここを横切って行ったりするのも、そのせいなのか。

やたらといい匂いがあちこちから匂ってくるのもそうか。

まいったなあ。匂いを嗅いだだけで、よだれが出るよ。嗅覚が優れているってのも、良し悪しだね。

さっき、酔っ払いのオジサンがバームクーヘンと言うものを置いていった。丸くてグルグル模様だから、食べてるうちに目が廻ったよ……

おおお！…… 何だアイツ。今、公園に連れられて入って来たアイツ、犬のくせに角が生えてるぞ…… しかも、やたら派手な赤い

服を着せられて。

『おい、お前、何で角生えてんだ？』

僕は彼に近づいて聞いてみた。

『どうもこうもねえよ……クリスマスは何時もこうさ。ウチの姉

御が好きで、この時期は毎年俺にトナカイの格好をさせるんだ』

『なんだ？とないって』

『サンタクロースとやらが、ソリを引かせる動物さ』

『お前、ソリ引くのか？』

『バカ言つな。そこまで出来るかつての』

『へえ……そりや大変だね』

しかし、飼い主のお姉さんは、妙に幸せそうだ。

「あら？何処のワンちゃんかしら。リードもなしで」

彼女は僕の頭を軽く撫でながら言った。

『いいじゃねえか。ネエちゃん幸せそうで』

『そう。だから、ガマンしてんのさ』

彼はそう言つて、飼い主にシッポを振って見せた。

彼を連れた女性は、そのまま公園内をぐるりと回つて、反対側へ

去つていった。

へえ、コスプレさせられるとは、最近の飼い犬はたいへんだね……

それにしても、今日はさつきの姿を見ないなあ。

そっぴやあ、昨日なんか言つてたっけ。

………

………

………

「だん吉。明日ね、あたし涼介に手編みのマフラーをあげるんだ。

ずっと編んでたのよ」

彼女は少し俯くと「貰つてくれるかなあ……」

とても自信なさげに呟いてたっけ。

「彼に拒絶されたら、だん吉にあげるからね」

彼女は開き直つたような笑顔でそう言った。

まあ、僕は自分の毛皮があるからそんなものに用はないけど、あいつ、大丈夫かなあ。

辺りが夕間暮れに包まれると、ぽつぽつと街灯が明かりを燈し始める。

さつきの気配だ。

公園の入り口にさつきの姿が見えた。

すぐに涼介の姿も現れて

「わりいな、こう言うの貰うと、実華がうるさいんだ」

「使わなくてもいいから、もらって」

さつきが持っている可愛い包みの中に、手編みのマフラーとやらが入っているんだろう。

「わりい。俺、行かなくちゃ」

涼介はそう言って、さつきのプレゼントは受け取らないまま駆けて行ってしまった。

さつきは一人、公園の入り口に佇んでいた。

その姿は、とても、寂しそうで……

見てはいけないような気がしたんだけど、どうしても彼女から目が離せなかったんだ。

零れそうな涙を堪えて、さつきが小走りに僕の方へ向かって来る。

「しゃあないなあ…… 僕も立ち上がって彼女に駆け寄って、せつなげに鼻を鳴らした。」

「だん吉。お前だけだね。あたしに寄って来るのは」

それは違うよ。きっと、さつきの笑顔に癒される奴が他にもいるはずさ。

彼女は包み紙の中から毛糸で編んだマフラーを僕の首にグルグルと巻きつけて、僕を抱きしめた。

あちこち編み目が跳んで、デコボコだし……

なんだか毛糸がこそばゆいけど、とっても暖かいよ。

「だん吉は、ずっとあたしの傍にいてね」

さつきが呟いた。

しょうがねえなあ、しばらくここに留まるか。

白い粉が、ひらひらと空から舞い降りて、僕の黒い鼻に触れた。

冷たっ……これ、雪じゃん。

さつきは僕を抱きしめたまま、空を見上げた。

その途端、彼女の瞳から雫が零れて頬を伝った。

街灯の光に照らされた雪は、空中でキラキラと輝いて舞っていた。

僕は耳をピクリと動かして、気配を感じた。

公園の入り口に、さつきの母親の気配だ。

僕はさつきの冷たくなった頬を舐めてあげた。なんだか、しょっ

ぱい味がした……

さあ、もう、お帰り。お母さんが待ってるよ。

きつと、さつきの家も、暖かいイヴの灯が燈されてるから。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3058b/>

イヴの灯

2010年10月9日12時56分発行